

# Prakaraṇapañcikā 研究 (III)

— Śālikanātha の認識論の一側面 —

黒 田 泰 司

Prabhākara 派の認識論の特色として、tripuṭīsaṃvid 説や svayaṃprakāśa 説がしばしば言及される。Prakaraṇapañcikā (PrP)<sup>1)</sup> を中心にこれらを考察したい。

I. Śālikanātha によれば、アートマンと思考器官の接触により発生したものが jñāna であり (p. 192), 「私はこれを知る (aham idaṃ gr̥hṇāmi)」という形をとる段階に至ったものが saṃvid (=saṃvitti, saṃvedana) である (p. 171)。それ故、saṃvid は jñāna の結果 (phala) である (p. 192)。この saṃvid は “aham idaṃ gr̥hṇāmi” というように、3つの単語のそれぞれが指示する pramāṭṛ (=ātman), prameya, pramiti (=saṃvid) の3部分から成る現われ方をする (p. 171)。pramiti はもちろん、pramāṭṛ や prameya は saṃvid の中にその形象 (ākāra) として顕現しているのではない (p. 183)。そういった要素をもつものとして saṃvid は単一のものである (p. 171)。以上が tripuṭīsaṃvid 説。さて、この saṃvid は照明 (prakāśa) を本質とし自ら輝く (svayaṃprakāśa)。prameya と pramāṭṛ は照明を本質とせず、saṃvid の照明に依存して輝く (p. 173)。こうして先述の saṃvid が成立する。以上が svayaṃprakāśa 説である。

II. PrP において saṃvid の教説が出現するのは、主として pramāṇa の議論中 pratyakṣa を論じる時である。しかしながら、この教説をそのまま pramāṇa の議論と結びつけることはできない。

① Śālikanātha は saṃvid の例として「私はこれを想起する (idam ahaṃ sma-rāmi)」をも挙げ (p. 171), 対象の理解 (arthapratīti) は認識 (grahaṇa) や想起 (smaraṇa) の形をとると述べている (p. 168)。ところで、彼は別の箇所では、想起は過去の認識の潜勢余力だけから生じたもので、独自に対象を確定するものではなく、pramāṇa とならないことを述べている (pp. 124-5)。したがって saṃvid は pramāṇa にもとづくものとは限らないことになるだろう。

② PrP 第3章 (Nayavithi 章) は誤謬 (bhrānti) の問題を扱っている。そこで彼は、saṃvid の対象 (saṃvedya) は、その saṃvid 中に顕現したものであるこ

とを説いたうえで (k. 23), 貝を見て「これは銀だ (idam rajatam)」という saṃvid が生じた場合、顕現しているのは銀であるから、銀が saṃvedya になると述べている (k. 24)。ただしここでは先程の 3 要素説は現われない。

このように saṃvid の教説は、pramāṇa の問題とは別個のものと考えなければならぬ。それにもかかわらず、pramāṇa の話との混同が目立ち (ex. p. 192), この saṃvid の教説が彼の認識論のうちに十分位置付けられていたものか疑問に思われる。そこで saṃvid 説の背景を考えてみたい。

**III.** まず、当面の問題に関係する Śabarabhāṣya (ŚBh)<sup>2)</sup> を挙げよう。

① nirākārā tu no buddhiḥ, ākāravān bāhyo 'rthaḥ / (p. 28)

② na hy ajñāte 'rthe kaścīd buddhim upalabhate / jñāte tv anumānād avagacchati / (p. 30).

ここでの buddhi は文脈上直接知覚を指していると思われる。①では buddhi が形象を持たぬこと、②では buddhi の存在は、対象が認識された時に推理されることが述べられている。

Śālikanātha は①の立場は守ろうとしている。ŚBh の buddhi を saṃvid と等置することには疑問も残るが、とにかく形象を認めない点では一貫している。pramāṭṛ や prameya の顕現を認めつつ、かつそれらの形象を否認するなら、tripuṭisaṃvid 説が主張されるのも首肯されよう。

②に関して、Prabhākara の Brṛhati<sup>3)</sup> を見ると、対象が知られた段階の認識を saṃvid と呼び、この saṃvid の存在から jñāna の存在が推理されると解釈していたようである (p. 84ff.)。さらに saṃvid について次の記述がある。

saṃvittayaiva hi saṃvit saṃvedayā, na saṃvedyatayā / (p. 82)

後半部は明らかに仏教徒の主張する、知識の自己認識論に向けられている。さて前半部で、saṃvid は saṃvid として知られると述べているが、これだけではどのようなやり方で知られるのかははっきりしない。Śālikanātha は, R̥jvimalā<sup>4)</sup> でこの部分を注解する際、svayamprakāśa という語を用いている (p. 83)。したがって svayamprakāśa 説の素地は Prabhākara にあったといえるだろう。

**IV.** さて、svayamprakāśa という語や知識が自己顕現するという発想から、Dharmakīrti の次の偈が連想される。

nānubhāvyo buddhyāsti tasyā nānubhavo'paraḥ / (Pramāṇaviniścaya)  
grāhyagrāhakavaidhruyāt svayaṃ saiva prakāśate // (Vetter, p. 86)

もちろん、上記の主張と外界に対象が実在すると考える Śālikanātha の基本的

立場は異なっている。しかし、Śalikanātha のように、3要素をもった saṃvid の自己顕現を認めてしまうと、対象の理解に対して実在対象が関与できなくなり、仏教徒の主張に接近した内容になる。

このことは Ślokaṽrttika, sūnyavāda 章に見られる Kumārila の態度と比べてみれば明らかであろう。自己認識論の矛盾を様々な角度から批判しつつも、対象を認識した段階の知識の顕現ぶりについて、まとまった言及はないのである。また認識の存在が推理によって知られるという ŚBh に関して、対象に存する jñātātā によって推理されると考え<sup>5)</sup>、実在対象との関連を意識していたらしい。

実在対象を契機とすることのない知識論の傾向は、すでに Prabhākara に見られたが、Śalikanātha はその理論的裏付けをはかる際に、Dharmakīrti から多くの影響を受けたと考えられる。そのことは彼の著作中に Dharmakīrti の文章が夥しく引用されることから推知される。svayamprakāśa 説への影響はすでに述べたが、3要素についても同様である。認識の要素として pramāṭr, prameya, pramiti を挙げるのは珍しいことではないが、単一の saṃvid のうちにこれらの顕現を認めようとするのは Dharmakīrti の影響であろう。彼は Mīmāṃsābhāṣyaparīśiṣṭa<sup>6)</sup> において3要素説を述べる時、あたかも典拠にするかのように Dharmakīrti の次の偈を引用し、究極的には否定されるものの、3要素から成る知識の顕現が無視できないことを指摘している (p. 18)。

avibhāgo'pi buddhyātmā viparyāsitadarśanaīḥ / (Pramāṇavārttika,)  
grāhyagrāhakaṣaṃvittibhedavān iva lakṣyate // III-354

Śalikanātha の説では、saṃvid の中にまた同じ saṃvid を要素として挙げるといふ不自然さがある。おそらく彼は上記偈文中の grāhya, grāhaka, (sva)saṃvitti をそれぞれ prameya, pramāṭr, pramiti と読みかえて自説としたのであろう。

いずれにしても実在対象を契機としないかのような彼の saṃvid 説は、彼の認識論体系にうまくおさまらず、また同じ実在論者の Bhaṭṭa 派からきびしく批判された。Sucaritamīśra が Bṛhatī を引用する時<sup>7)</sup>、「仏教徒臭いミーマーンサカ」と呼んだのは、Prabhākara 派の saṃvid 説の傾向をよく指摘しているといえる。

1) Banaras Hindu Univ. 版。 2) Frauwallner's ed. 3)・4) Madras Univ. 版。

5) Nyāyasiddhi on PrP, p. 188. Cf. J. Sinha, Indian Psychology, vol. I, p. 199ff.

6) Madras Univ. 版。 7) Kāśikā, vol. II, p. 119. 引用される Bṛhatī は本文で挙げたもの。p. 109にも同文の引用。

(日本学術振興会奨励研究員)